

## アウトリーチの観点から見た過疎地域における公共図書館のアクセシビリティ

清水 篤司

日本の地方中小都市では、人口減少や少子高齢化などにより、慢性的な過疎化や地域コミュニティの希薄化などの問題が起きている。公共図書館では地域住民の交流や地域づくりの拠点となる場として機能していくことが重要である。本研究は、こうした背景から、図書館アウトリーチの「奉仕対象地域内において、図書館のアクセシビリティ(来館のしやすさ)を平等にしていく」という考えに基づき、地方中小都市における「誰もが来館できる図書館環境」を考察することが目的である。

これまでの図書館アクセシビリティ研究では、利用圏域が地域のモータリゼーションや図書館規模に影響を受けているということが明らかにされてきた。しかし、人口減少や少子高齢化といった地方中小都市の現状を反映した研究はなされておらず、本研究はこの点に着目する。

本研究では過疎の進む地方自治体において、図書館来館者 400 名へのアンケート調査や図書館登録者調査を行い、図書館利用の特徴や利用圏域を明らかにした。また、図書館職員へのインタビュー調査を行い、図書館アクセシビリティ向上のための取り組み実態などを明らかにした。さらに、図書館利用統計から図書館利用実態の推移を調査した。

図書館の利用要因としては貸出利用が中心であることが明らかになった。高齢の利用者にその傾向は強く、逆に 18 歳未満では作業場所としての利用が主な利用要因であるなど、年代によって差があることも明らかになった。

来館方法としては自家用車が最も多いことが明らかになった。来館者調査から、一定数の利用者が自家用車以外の来館手段がないことに不満を持っており、地域公共交通の拡充は図書館利用に大きく影響を与えることが予想される。

広域的な図書館利用では周辺自治体の図書館規模や昼夜間の人口移動が利用圏域に影響を与えており、駅など、公共交通機関の拠点となる場所に立地することが利用を増加させると考えられる。

これらの調査結果から、「誰もが来館できる図書館環境」として、「利用圏域が小さく、作業場所としての使用が多い 18 歳未満の利用者には、分館設置などで来館距離を短縮し、学習室などを設けて利用要因を生み出すことが望ましい」、というような図書館利用特性(利用者の属性等から導かれる図書館利用上の特徴)ごとに望ましい図書館環境を考察した。

課題として、図書館利用特性ごとの「誰もが来館できる図書館環境」をすべて満たすことは地方中小都市における公的サービスの施設規模や地方財政の点で厳しいため、地域の在り方や利用者ニーズを把握し、絶えず最適な図書館環境を見出していく必要がある。

(指導教員 呑海沙織)